

ブックマン 50 年
1973 年アランデル・エズデイル講義

セオドア・ベスターマン（訳 石井 健）

ブックマン 50年 1973年アランデル・エズデイル講義

セオドア・ベスターマン（訳 石井 健）

凡 例

1. 本書は、*Fifty years a bookman : The Arundell Esdaile Lecture 1973 by Theodore Besterman* (London : The English Association and The Library Association, 1974) の翻訳である。
2. 原著は地の文がイタリック体、強調部分や書名がローマン体で印字されている。訳文では原著のローマン体の部分は傍点を附して示した。ただし、それが書名の場合には、『』に入れて示した。
3. 原註は〔 〕で示し、頁末ごとに記した。訳註は（ ）で示し、文末にまとめて記した。
4. 訳者による補足は [] に入れた。

ブックマン 50 年 1973 年アランデル・エズデイル講義

セオドア・ベスターマン (訳 石井 健)

I

ブックマンという言葉には少しばかりノスタルジックな世紀末的な感じがします。生涯にわたって情熱的に書物と恋を重ねた人のことだというのはとても十分ではありません。しかし、書物についてすることができるとほとんど全てをした人については、これ以上に当てはまりそうなものを私は知りません。私はいちども書物を燃やしたこともなく検閲したこともありませんが、多くの書物を著し、共同執筆し、寄稿し、アンソロジーを編集し、書物や叢書を編集し、書物について講義し^[1]、書評し、翻訳し、索引を作り、自分の手で活字を組み、印刷し、製本し、出版しました。私はまた少なくとも三つの雑誌を創刊し、編集しました。このうちの二つは今なお続いています、それは『文献雑誌 (*The Journal of documentation*)』と『ヴォルテールと 18 世紀研究 (*Studies on Voltaire and the eighteenth century*)』です。後者は私が今でも編集しており、120 巻に達しています。私は書物や逐次刊行物^[2]のカタログやリストを作り、書物のリストのリストを作り、書誌学の初期の歴史を切り開きました。

次のことを知ることはあなた方を楽ませるかもしれません、それは、私が編集した最小の書物が『のんきな考え』(ジュネーヴ、1956 年)^[1]というタイトルで、128 折の判型に 5 ポイントの活字で組み、3.4 cm×2.5 cm のものであり、判型の最大のもは二折の『ヴォルテールの家計簿』(ジュネーヴ&ニューヨーク、1968 年)^[2]、これは 38 cm×28.2 cm である、ということです。こうした細々したことが愛書家の興味をかき立てるといわれています。

II

私はまた書物を蒐集しました。それは今なら愛書家的精神とみなされるものからではなく、純粋な愛情あるいは必要からでした。私はしばしば書物を買いましたが、それはたんに美しいとか特に興味があったからです。私が特にこういうのは興味をかき立てない書物といったものはないからなのです。まったくそうで、私は 1929 年にパリにいて、その年に出て後にたいへん賞賛されるようになったジェームズ・ジョイスに関する書物 *Our*

[1] ロンドン大学図書館学部の特別講師として、複数のアメリカの大学の図書館学部の臨時講師として。

[2] というのも、私が『英国雑誌総合目録 (*British union-catalogue of periodicals*)』を発案し、計画を立て、タイトルページにどうあろうとも、大部分を編集したから。

exagmination round his factification⁽³⁾をオデオン座通りにあるシェークスピア書店で購入し、その中で、サミュエル・ベケットという名の無名の若者によるエッセイに魅せられました。たぶん私は最初のベケットファンになったのでしょう、私は多くの国の本屋を訪ね、彼らにヴォルテールかサミュエル・ベケットが書いた何かを提供できるかどうか尋ねますと、彼らがびっくりした表情を浮かべるのをしばしば子供のように楽しみました。これが40年間続き、1970年には私の書棚はこの多作な沈黙の予言者による、そして彼に関して様々な言語で出された著作のほぼ完全な膨大な蒐集であふれてしまいました。田舎に引越すときにはそれを売らざるを得なくなりまして、今はマックマスター大学の図書館にあります。

これは最も純粋な賞賛と愛着から集めたコレクションでして、実用性という点では私には全く無用のものでした。というのも今までベケットについて一字一句出版したことがないからです。それはそれとして、私は主に機能的な理由から書物を集めてきました。長い間、私は毎日図書館が開かれている間はそこで大がかりな仕事に携わっていました。ですから、それ以外の全ての仕事は家で行わなければならない、ロンドン図書館⁽⁴⁾もウィリアムズ博士図書館⁽⁵⁾も私の必要なものの全てを満たせませんでしたので、そんなわけで私の書棚に書物が蓄積されました。こうして、私が『オックスフォード書誌学叢書 (Oxford books on bibliography)』シリーズの編者の1人で、キャデル&デイヴィス (Cadell & Davies) 出版社についての巻を編集したときに⁽⁶⁾、幸運にもアーノック (Earnock) の手稿を見つけ、それらをスコットランド国立図書館へ与えるよう国立図書館友の会 (The Friends of the National Libraries) を説得しました。その後、私はバーンズ・テキストの歴史に関するコンパニオン版を企画しました。これはオックスフォード書誌学叢書が不幸にも中止されたとき挫折しましたが、その時までにはバーンズの諸版本をほぼ完全に集めていました。このコレクションは同時に版元製本の代表的なコレクションでして、つまりこうした装飾製本が発展した時期に、バーンズがこの国でシェークスピアも含む他の著者よりもたいへん頻繁に印刷されたというのは注目すべき事実であるということです。私の家 (ハムステッドのガイオンハウス) がドイツ軍の爆弾でひどく破壊されたとき、バーンズ・コレクションを処分しなければならませんでした。それは今はニュー・ハンプシャーのダートマス・カレッジ図書館にあります⁽⁷⁾。

同様に、私はヴォルテールを蒐集したいとは特に思っていませんでした。それはかりにやったとしたら確かに無謀な試みです。しかし、もし私が自分の手元に必要な書物を持っていなければ、私が引き受けた幾分大量の編集の仕事は不可能だったでしょう。というのもこの多作な天才の書誌は他のいかなる作家のものよりも複雑だからです。テキスト的に重要な彼の版は数十、数百の単位ではなく数千の単位でした。そしてそれはほんの一部でして、ヴォルテールの手紙の手稿が市場に出回ったとき、それなしにすまずという考えや、まして原資料が入手できるときに二次資料によって出版するという考えは、持ち合わせていなかったからです。そうして一つのことが他のことを導き、ついに私は偉人の家にヴォ

ルテール研究所兼美術館 (Institut et Musée Voltaire) を設立したとき、コレクション全体をジュネーヴ市へ寄贈しました。ただそれは私が今まで行ったことの中でも飛び抜けてばかげたことでした。コレクションを手放したからではなく、墮落した外国人嫌いの市当局に無条件にしかも生存中に寄贈したからです。このコレクションは今や 12,000 冊の印刷本、ほぼ同数の手稿、大量の絵画、彫刻、版画などに膨れ上がりました。私が自動的に新しい取得物をレ・デリス (Les Délices)⁽⁸⁾ のコレクションに追加することをやめて以来、さらに相当の量が、特に手稿が作業道具として私の手元に再び蓄積されています。

ただし、次のことを告白しなければなりません。私の最も愛した書物コレクションは 15, 16, 17 世紀の美術書のコレクションです。それは私の情熱の多くを掻き集めました。それは西洋美術の印刷された資料を例証しようとしたものです。コレクションは、ステファノ・デラ・ベッラ⁽⁹⁾ による少数の版画セットや、不思議なくらい多作なジャン・ル・ポートル⁽¹⁰⁾ による多数の版画群といったようなオリジナル作品を含んでいます。当然それはまたアルベルティのもの (1540 年)⁽¹¹⁾ のような、美術に関する理論的な研究論文も含んでいますし、レオナルド・ダ・ヴィンチの絵画に関するもの (1651 年)⁽¹²⁾、ポンポニウス・ガウリクスの彫刻に関するもの (1504 年)⁽¹³⁾、フェイソーンの彫版に関するもの (1662 年)⁽¹⁴⁾、多くの人の広義の建築に関するもの、その中にはフルテンバッハの見事な『造船術』(1629 年)⁽¹⁵⁾ を含みますが、そのような美術の特定の形式についての論考も含んでいます。遠近法と解剖学に関する著作も軽視していません。前者のカテゴリーではアッコルティのもの (1625 年)⁽¹⁶⁾、後者では偉大なデカルトのもの (1662 年)⁽¹⁷⁾ のように、特に美術家に向けたもの、あるいは美術家に役に立つものであるときにはそうです。ヴァザーリのもの (図版入り初版, 1568 年)⁽¹⁸⁾、たぶん最初の抜き刷りである彼の『偉大なミケランジェロ・ブオナロティの生涯』(1568 年)⁽¹⁹⁾ は言うまでもありませんが、こうした歴史的書誌的作品も重要な役割を果たしています。考古学的遺物に命を与える多くの試みについても同様です。その中でもカルヴォの『画像』(1532 年)⁽²⁰⁾ は最も珍しく、デゴデによるもの (1682 年)⁽²¹⁾ は少なからず壮大なものです。ローマへの初期の案内書の場合のように、旅行者の案内書もしばしばたいへん重要で、そうしたものとして『画家のイタリア旅行記』の英語版 (パリによる, 1679 年)⁽²²⁾ があります。

こうした書物の種類は全て自明のものです。想像力をかき立てれば、最も刺激的な模範のいくつかを直接には期待していない場所で発見します。そうしたものとして、(プロット 1686 年)⁽²³⁾ のような自然誌に関する書物や、とりわけ花 (パーキンソン 1640 年)⁽²⁴⁾、果実 (フェッラーリ 1646 年)⁽²⁵⁾、樹木 (ヨンストン 1661 年)⁽²⁶⁾、園芸 (ル・ブトー 1680 年?)⁽²⁷⁾、哺乳動物 (アルドロヴァンディ 1621 年)⁽²⁸⁾、鳥類 (オリナ 1622 年)⁽²⁹⁾、魚類 (チャーミングでウィットに富んだピエール・ベロンの『魚の本質と多様性』1555 年)⁽³⁰⁾ といったもの、昆虫 (ヤコブ・ホエフナーゲルの絶妙な『異なった翼ある昆虫の像』1630 年)⁽³¹⁾ といったもの) に関するものがあります。スポーツについてもいうに及ばず、フランシス・バーロウの天才とホラーの天才が結合している『狩猟のいくつかの方法』([1671 年])⁽³²⁾ のようなもの

です。見事な行列用の本やカリグラフィーの本、祭りや紋章についての魅力的な記述も忘れてはいけません。これら4種類の見本は[ショーヴォー?]による素晴らしい書物(1549年)⁽³³⁾、アンフィアレオによるもの(1548年)⁽³⁴⁾、『魅惑的な島の娯楽』(1673年)⁽³⁵⁾、アルチアティのバリ初版(1534年)⁽³⁶⁾です。

活版印刷術の分野では、ルカ・パチョーリの『神の調和について』(1509年)⁽³⁷⁾やジェフリー・トリーの『お花畑』(1529年)⁽³⁸⁾の現存する最良のコピーに一時的な避難場所を与えるだけの幸運がありました。

最後に、最も洗練された美しい図版のいくつかが、なんと軍事書に見出されます。見事な装飾のヘルマン・フーゴーの『騎兵について』(1630年)⁽³⁹⁾やフランチェスコ・マルツィオーリの『軍人の教訓』(1670年)⁽⁴⁰⁾などです。デューラーの版(1525年)⁽⁴¹⁾のように、美術に適用された幾何学を扱っていようとまいと、技術的な作品も無視していませんし、非常に珍しいフェルディナンド・ベルテッリの『我々の時代のほとんど全ての種族の服装について』(1563年)⁽⁴²⁾のような衣服に関する書物、ダンス(カローソ 1581年)⁽⁴³⁾、体操(メルクリアーリス 1573年)⁽⁴⁴⁾、曲芸(トゥッカーロ 1599年)⁽⁴⁵⁾に関する書物、ジュッセのもの(1627年)⁽⁴⁶⁾のような傑作を生み出す特有の工芸、歴史(フォレストティによる 1497年のもの)⁽⁴⁷⁾のような、特別な肖像画という点で)、旅行、敬神に関する書物も無視できません。しかしながら、こうした最後の種類の書物はたいへん多く、少数の目立った例によって代表されているにすぎません。

コレクションはまた図版で有名な一般書の小グループも含んでおり、デューラーの木版画付ロスヴィーダの『著作集』(1501年)⁽⁴⁸⁾、ホルバイン⁽⁴⁹⁾の図版付エラスムスの『愚神礼賛』(1676年)⁽⁵⁰⁾、ヴォルゲムートの木版画付フリドリッヒ『宝箱』(1491年)⁽⁵¹⁾、ヴォルゲムートとプライデンヴルフ⁽⁵²⁾の図版付シェーデルの『ニュルンベルク年代記』(1493年)⁽⁵³⁾などです。

このコレクションは今なお私の所蔵品の中で増殖中で、その完全な目録は印刷中です⁽⁵⁴⁾。

私はまた、様々な方法で、書物の保存に大いに貢献しました。それにはミニ印刷複製技術の多くの先駆者の一人であることもありますが、しかし、おもには私が戦争中に一精力的な活動の合間に一戦後の状態回復を組織化するためになしうる全てを行ったことによります。私の「国際図書館情報センターの提案」⁽³⁾について、長い間ユネスコの図書館プログラムの責任者だったエドワード・カーターが、ありがたいことに記録にとどめてくれていまして、私は「戦後の図書館の状態回復という巨大な仕事を扱うための実際の行動パターンを定めたおそらく最初の人であり、彼は」ユネスコ図書館プログラムの「最初に含まれる示唆の大部分を見て満足した。彼の提言は図書館の状態回復という当面の戦後問題をはるかに超え、図書館相互間のコミュニケーションシステムという究極の枠組みとして想像

〔3〕 1943年9月、図書館協会の第18回大会にて報告。

豊かな書誌的構造の創造を含んでいた。』^{〔4〕}

III

私は自分が書いたり編集した書物について何も語るつもりはありません。それは苦痛ですし、あなた方を退屈させるでしょうから。けれどもあなたが私の数え上げた中で注目しているかもしれない細部についてはいくらか語りたいとは思います。それは印刷業者・出版業者としての私の活動です。前者はたんに生涯にわたる愛書家として私の別の様相の結果であり、それが高じて個人印刷所を設立するに至ったものです。当時ガイオンハウス印刷所は一つの屋根の下で編集、組版、印刷、製本、つまり全ての作業が行われたこの国で唯一のものでした。印刷所は1940年のロンドン大空襲の際に完全に破壊されました。もっとも、それは私がいくらか価値のある作品、特に『マグナ・カルタとイギリスの自由に関するその他の章典』^{〔55〕}をわずかながら、なんとか生み出したあとではありました。ちなみに、この書物は現在の美麗本の中でも、特にベラムによるものでは大変珍しいものの一つになっています。その当時、それは書物生産の年間最優秀例の一つに選ばれました。妙な話ですが、私は二つの国で尊敬されています。というのも、『ヴォルテール書簡』^{〔56〕}もまた後に選ばれましたが、しかしこのときはスイスでのことだったからです。

私は全く異なった理由から出版業者になりました。1935年頃、オックスフォード大学出版局に後に『書誌の世界書誌』^{〔57〕}になった書物の企画を提出した時、ハンフリー・ミルフォードとR・W・チャップマン、当時それぞれロンドンとオックスフォードの営業部長でしたが、彼らが私に、検討と感想を引き延ばしたあげく、その本は実行するに値せず、仮に値したとしても、一人でそれを成し遂げることは不可能だと言いました。これは恐ろしい一撃でした。しかし、私はよくそれに耐え、そこから学ぶ準備がありました。それはパーナード・ショウへの長く久しい賞賛と彼の出版方法についての大変立ち入った知識故に。要するに、私は出版業者になったのです。その日以来、私は自分の刊行不能の著作、すなわち、図書館が不可欠とみなした著作の全てを自分で作りました。結果として、書店、私がいつも出版業者よりももっと消耗用とみなしていた、少なくとも『世界書誌』や『ヴォルテール書簡』のような書物にとってはそうみなしていた、仲買人の一族との絶え間ない闘争に巻き込まれました。この非難が絶対的ではないといえるのは嬉しいことで、バジル・ブラックウェルとの関係はいつもこちよいいものだったからです。そして書物購入者として私は、マグス氏やゴールドシュミット氏やその後継者たちのような紳士と長くうち解けた関係を保ってきました。実をいえば、何か取引といえるようなことをしたのは一つの書店だけです。それはニュー・ヨークのクラウスで、その振る舞いはフランス人が形容の言葉もないと呼ぶものでありました。

〔4〕「ユネスコ図書館プログラムの誕生」、Tveterås 記念号、185 ページ。カーターは世界書誌学図書館センターというアイデアを私のものとしているが（195 ページ）、彼の記憶の誤りである。この大げさなタイトルは私の発明ではない。

『世界書誌』の初版を出版したとき、割引を認めないからと書店が厳しく非難したのは事実です。第2版の出版前に彼らを回って、予約注文をするなら割引しようと言いましたが、申し出に応じたものは誰もいませんでした。それにも関わらず、私は第3版では割引を認めましたが、今度は割引が大きくないからと以前と同様に非難を受けました。そして、販売にはたいした効果はありませんでした。第4版では、再び割引をしませんでした。

『ヴォルテール書簡』の作業をしているとき、もう一度試みることにになりました。エーメンハウス⁽⁵⁸⁾の面々は変わりましたが、態度の方は少しも変わりませんでした。財団も完全に一致して私を一笑に付しました。それで再び私は自分で前に進むことを決意したのです。仕事を計画し実行し、しかもビジネスマンに変身しなければならなかったというのは、あまりに不公平だと思いましたし、今でもそう思っています。この性に合わない変貌は骨折りと涙と汗なしでは達成できませんでした。幸運にも、短命なガイオンハウス印刷所で印刷と出版の実務の若干を学んでいました。それでもそれは苦痛な経験でしたし、少なからぬ苦々しさを残しています。『ヴォルテール書簡』の進行中に—そして結局これは107巻に及ぶ膨大な事業でしたが—支出が最高に、収入がゼロになってしまい、私は破産寸前になりました。

私は自分の努力によってこうした重要な事業をどうにか成し遂げました。しかし他人の協力なしでは進まないときには、必ずしも成功ばかりではありませんでした。これはなぜだったでしょう。私はこういった失敗を自分の気質的な欠点のせいにすることに全く異存ありません。妥協を望まず、個人主義的傾向が非常に強く一筋金入りの社会主義者としてはたぶん風変わりでしょうが—そして、とりわけ策略を嫌う。一例を挙げましょう。ヴォルテールの書簡と『ヴォルテールと18世紀研究』を編集するためにヴォルテール研究所兼美術館を創設したとき、スイスでの調査作業がこの分野ではとても困難であることを発見しました。これは大部分連邦国家制によるものでして、つまり立派な図書館はいくつもあがるが、中心的大きな図書館はなく、比較的新しいベルンの国立図書館はまだ勘定に入っていないということを意味しています。そのため、例えば、どの図書館も私が日々必要とした18世紀フランスの主要な雑誌をどれも完全なセットで持たず、大部分の図書館は部分的なセットを持っているに過ぎませんでした。私は州の司書の会議を招集し、便利のように分配して完全なセットを作り出すような州間での交換計画を提案しました。これは明らかに気の利いた考えでしたが、司書の表情には完全な恐怖の色が浮かび上がっていました。ヴォルテールの理性を無邪気に信仰していたために、私は重要な要因、スイス愛郷主義の非合理的なまでの強さを見逃していました。それは不完全なセットを完全にしその価値を高めるであろう他の号との交換であってさえ、雑誌の半端な号を、しかも外国人の示唆で、手放すことなど期待できないものでした。

こうした気質的な欠点は、失敗した⁽⁵⁾プロジェクトのいくつかは筋が通っており、いつか結果を出すだろうという、私の信念によってたぶん例示されるでしょう。そのうちの二つについて若干説明しておきましょう。これは私にとっては自分の出版した作品を説明する

よりも、あるいは私が知っている文学者の自慢をするよりも、あるいは逸話にふけるよりも、まちがいに役立つに違いありません。

IV

私が最初に議論したいプロジェクトはヨーロッパ・ユニオン・カタログについてのものです^[6]。提案一般の本質的な利点をあえて正当化する必要はほとんどないでしょう。ユニオン・カタログというものは中世後期にまでさかのぼります。現代では、ワシントンのナショナル・ユニオン・カタログが今世紀の始めに緩やかな発展を開始しました。最初はその成長がとても遅く、多くの疑問もありました。しかし今日では、それが包含するあらゆる有用性を問題するものは誰もいません。

それでも、大規模なユニオン・カタログの本質的価値について、一つの飛び抜けて重要な点は指摘する値打ちがあるでしょう。大図書館の蔵書が相互に類似していると想像されるために、時々疑問が生じます。こうした疑問は自然なように見えますが、実際にはその見解はたいへんな錯覚です。例えば、イギリスの図書館の所蔵雑誌といった非常に限られた分野でさえ、重複の度合いはあまりにわずかで、所蔵部数とタイトル数の比率はほんの1.8対1程度であることが分かりました。つまりそれはもちろん、雑誌の大部分はたった一つの図書館にしか見つからないと言うことです。印刷物一般といういっそう広い分野でも同じことがいえます。例えば、スイスの20の図書館の比較的小規模なユニオン・カタログでは、記載事項の84パーセントを下らない分がまったく重複していません。同様の結果がそうした調査で常に得られます。一つだけ大規模な例を挙げますと、ワシントンのユニオン・カタログのサンプルの記載事項2293件(AbeからAberdeenまで)とブリティッシュ・ミュージアム・カタログ、フランス国立図書館カタログ、ドイツ総合カタログの対応する部分とを比較した場合、これら三つの一覧表は合わせても同じ範囲内に1652件しか含んでいません。つまり、ワシントンのユニオン・カタログは三つのヨーロッパのカタログを合わせた物よりも30パーセントも多く含んでいるのです。しかしながら、それにもかかわらずヨーロッパのカタログに記載されている事項の63パーセントがアメリカのカタログではなく、逆に後者の記載事項の73パーセントが前者にはないという事実はさらに注目すべきです。三つのヨーロッパのカタログは、完成すると、少なくともワシントンのユニオン・カタログに存在しない600万件の記載事項をもたらすだろうという計算になります。この数字に直面すれば、多国間ユニオン・カタログの潜在的な相互有用性を強調する必要はほ

[5] 私が最も深く後悔した失敗は、別の分野にあった。多年、私はイギリスの水彩画と線画を蒐集していたが、それはナショナルギャラリーの中核として国に寄贈するためだった。政府や大ロンドン市議会との私の議論は無に帰し、私は最後に自分のコレクションを解体しなければならなかった。

[6] この主題について以下に述べることは、公式の文献と私の論文 'The European union catalogue project', *The Journal of documentation* (London June 1958), xiv. 56-64 に基づく。

とんどないでしょう。

ヨーロッパの内部でさえ、数的比較はかなり印象的です。同じ 1652 件のサンプルのうち、わずか 60 件がブリティッシュ・ミュージアム・カタログとフランス国立図書館カタログの両方に見つかり、65 件がフランス国立図書館カタログとドイツ総合カタログの両方に見つかり、29 件のみが三つのカタログ全てに現れます。このような驚くばかりの印象的な数字は大規模ユニオン・カタログがどれほど価値があるかを決定的に証明しています。(ある限界内で) 領域が広くなればなるほど、そうした編纂の有用性は増すからです。書誌的な調査が最も遅れている国々の図書館資源が共通のプールへ利用できるようになると、注目すべき結果が得られるだろうということは間違いありません。ですから、ヨーロッパ・ユニオン・カタログは疑いもなく主として最も遅れている国々に有用でしょうが、最大の図書館を持つ国々でさえその図書館が最も不十分な分野では相当の利益を得るでしょう。

私がユネスコで働いていたとき、印刷本に関するヨーロッパ・ユニオン・カタログの可能性を見極めるための試験的なプロジェクトの実施を認可されました。私は目録編纂組織をバリ、ベルン、プラハ、プラティスラヴァ、コペンハーゲン、アールフスに設立し、明らかに不可欠な新しい目録規則を編纂しました。たった 3 ヶ月間にわずか実働 7 人の目録編纂者の作業の結果、73,000 枚のカードが 5 つの国からユネスコに送られてきました。不幸なことに、プロジェクトはまだ何の結果も利用できないうちに、参加国やその代表者からではなく、語るのも恥ずかしいことですが、むしろ何人もの司書から激しい批判にさらされました。ユネスコは災厄のような論争から逃げ出し、プロジェクトは裸の赤子の状態で即座に放棄されました。利用可能な基金は、僅か 19,809 枚のカードが整理され、部分的に分析されたところで底をつきました。カードは A から Ah まで進んだところでした。この比較的小さなサンプルでさえ、その結果は驚くべきもので、注目に値します。チェコスロヴァキアの二つの図書館^[7]、デンマークの二つの図書館、フランスとスイスにある部分的に重なる二つの図書館でプロジェクトを設立することで、私が個人的に期待していた結果に反する試みを私が故意に重視したように見ることができます。にもかかわらず、結果はむしろ本当に驚くべきものでした。

[7] しかし残念なことにプラティスラバのカードは技術的な理由により破棄されねばならなかった。

一つの図書館から報告された図書	17,769 件
二つの図書館から報告された図書	1,656 件
三つの図書館から報告された図書	329 件
四つの図書館から報告された図書	51 件
五つの図書館から報告された図書	4 件
	19,809 件

この結果は一つしかない図書は各図書館の国語の中にあったという事実によるものであったと推定をされるかもしれません。ただしフランス語はフランスとスイスに重なっており、ドイツ語はチェコスロヴァキアとスイスに共通であることを忘れてはいけません。しかしながら、そういうことではありません。サンプルがあまりに小さくて詳しい分析は行えないのですが、しかしとにかく、最初の 7,947 枚の整理済みカードを詳しく勘定したものからの、そしてバランスのとれた絵を与えてくれないことが明らかな、いくつかの意味ある数字がここにあります。

整理済みカードの枚数	
アールフス	760 枚
ベルン	1993 枚
コペンハーゲン	387 枚
パリ	4040 枚
プラハ	767 枚
	7947 枚

各図書館の作業結果の違いは、新しく目録を編纂したものを表している場合もあれば、既存の記載事項を再度記述したもののみが含まれている場合もあったという事実によります。

ここに報告されたフランス語とドイツ語の図書の分析があります。

パリからのみ報告されたフランス語の図書数	1826 冊
パリ以外の一つの図書館から報告されたフランス語図書の数	278 冊
一つの図書館から報告されたフランス語図書の合計	2104 冊
二つの図書館から報告されたフランス語図書の数	254 冊
三つの図書館から報告されたフランス語図書の数	50 冊
四つの図書館から報告されたフランス語図書の数	4 冊
五つの図書館から報告されたフランス語図書の数	1 冊

一つの図書館から報告されたドイツ語図書の数	1568 冊
二つの図書館から報告されたドイツ語図書の数	260 冊
三つの図書館から報告されたドイツ語図書の数	82 冊
四つの図書館から報告されたドイツ語図書の数	15 冊
五つの図書館から報告されたドイツ語図書の数	3 冊

このような統計は図書の質を考慮していないから決定的なものではないという批判にありました。これは中央研究図書館の機能を誤解したものです。こうした図書館は偉大なあるいは標準的な書物を提供するために存在しているものではありません。どんな公共図書館も学部図書館もそんなものは所蔵しています。ブリティッシュ・ミュージアムやフランス国立図書館は、珍しい本、忘れられた本、無名の一たいてい本質的に価値のない一本を、たびたび求められるわけではないけれど、求められるときには絶望的なほど必要とされて、見つけることが出来ない本を提供するためにあるのです。

ヨーロッパ・ユニオン・カタログについてこれ以上決定的な説明はほとんどなされえないだろうといっても、確かに私は間違っていないでしょう。それは間違いなく望ましいものの、完全に実行可能なものですから、ヨーロッパ共同体の始まりを経験している今、それはヨーロッパ統合への著しい貢献をはげますものではないでしょうか。

最後に一言。ユネスコの試行プロジェクト、極めて困難な戦後の状況下で 73,000 枚のカードを作ったこのプロジェクトの追加費用全体は、旅費及びタイプライター、ファイルキャビネットその他諸々の資産を含めて、僅か 16,550 ドルでした。

V

二番目の不成功なアイデアプロジェクトの地位に達しさえしなかったためにそう呼んでいます—は大図書館向けの新しい種類のカタログについてです。それは元々、当時アメリカ議会図書館長であったルーサー・エヴァンズからその図書館とその目録について私の見解を述べて欲しいと招かれた結果でした。知的なもてなしであるそのレベルの注文は率直な返答を誘い、それに値します。そこで議会図書館の目録の分析^[8]を始め、それは以下の条件を満足しなければならないと指摘して、解決方法を提案しました。1. できあがる目録は完璧でなければならない。2. どの一つのアルファベットも常に新しくなければならない。3. どこでも利用できるものでなければならない。4. 利用しやすくななければならない。5. 場所をとらないものでなければならない。6. 費用がかかりすぎてはならない。いいえなかったのは、これらの条件が全て議会図書館の目録に欠けているということでした。

[8] そのうち、私の 'The Library of Congress and the future of its catalogue', *The Journal of documentation* (London March 1946), i. 194-205, はその要約にすぎない。続きは 'Symposium on "The Library of Congress and the future of its catalogue", by Theodore Besterman', *idem* (March 1947), ii. 245-254.

提案した解決方法はカードカタログの廃止を含んでいたことを併せて申し上げておきましょう。要するに、提案は次のようなものでした。完全に新しい目録はルーズリーフ型で作られること、目録の活字は組み置きしておくこと、新規目録記載事項分の活字は継続的に組み置き活字に組み込まれること、決まった間隔で、一月毎あるいは一週間毎でもよいですが、変更があった頁はいずれも印刷しなおされ、目録の元頁と取り替えられるべきであること。

私が立てた六つの条件をこの計画がどのように、そしてどの程度満たすのかを考えてみましょう。完璧さに関する限り、それは確かにそれだけで完全になることはないでしょう。目録の物理的形態のみを問題にする計画は、何であれ、完璧さを達成できません。それは政策と予算の問題であり、どのような目録改革それ自体とも別物です。これとの関係で私の目録に対して要求されることは以下が全てです。A. 私が骨子を述べたような目録は、ごく少数の図書館だけが対処しうるようなスペースの問題を生むことなく、無限にふくらむ記載事項数を収めうる一番好ましい枠組みを提供し、B. 莫大な、何であれ新しい歳出予算を要求することなく、このような巨大な事業の費用にたえられるということです。これはたしかに最初の条件を満たすのに大いに役立つでしょう。

目録は常に最新のものでありたいという点は議論を要しません。それは提案の不可欠な一部です。毎週再版されるなら、出版あるいは取得から目録への組み入れまでの時間差は目録作成の時間+印刷の時間+1週間だけでしょう。目録の「死んだ」部分の頁、したがって再版されず、やがて消えてしまう頁のことですが、それは僅かな費用で置き換えられてしまいます。この問題点についてこれ以上のコメントは必要ないでしょう。

同じことが次の条件、どこでも利用できるという条件についても当てはまります。明らかに、この形態の目録はスペース、あるいは備品や維持費への投資という特別な問題を何ももたらさず、適切な価格で寄付されますので、どこでも利用できるでしょうし、全ての一般図書館にとって優れて不可欠な唯一のレファレンスツールとなるでしょう。

その目録は、確かに微細な「活字」のついた、写真式『目録』⁽⁵⁹⁾よりも利用しやすいでしょうし、カード目録よりもはるかに利用しやすいでしょうし、マイクロフィルムやマイクロカードといった性質のどんなものよりもいっそう利用しやすいでしょう。

さて次は、提案のおそらく問題的な側面であるスペースと費用についてです。もちろん明らかに、平均的な目録カードのレイアウトでスペースを考慮するのは見当違いです。カードの大きさは決まっており、ほとんどのタイトルは1枚のカードに収まり、したがってものは利用できる表面全体で十分に処理される方がよいです。タイトルがとても短くても、やはりカード全体が使われなければなりません。私が工夫した見本のレイアウトでは、1頁に25件分が含まれるでしょう。この見本は純粹に例示と比較のために提供したもので、印刷術的にも書誌的にも、熟慮の末の提案と考えてはいけません。それは10ポイントのセントー⁽⁶⁰⁾の、狭く小さくとても読みやすい活字面と、非常に魅力的なイタリック体（アリーギ⁽⁶¹⁾）で組まれています。しかしながら、別の点では目録作業に完全に適してはいませ

ん。ですから繰り返しますが、この見本は必ずしも明確な推薦物ではないのです。ペンボ⁽⁶²⁾の方がもっとよいかもしれません。ブリティッシュ・ミュージアムの『総合目録』の頁は(『目録』の435平方cmに対して)468平方cmの活字領域を持ち、より大きな活字で平均30件以上を含んでいます。しかし、アメリカ議会図書館の入力フォームはブリティッシュ・ミュージアムのものよりも長いという事実は考慮しなければなりません。

さらに、提案された目録は用紙の片面にのみ印刷されており、300枚で便利な1冊になっていると仮定してみてください。これは1冊に7500件、つまり2インチの厚さとなるでしょう。そうすると、200万件は8万枚または約266冊となり、45フィート以下の書架スペースを占めることでしょう。どんな図書館長も渋い顔になることのない数字です。もし目録が1000万件にまでふくれあがっても、結果として生じる規模、つまり1330冊と225フィートの書架スペースはまだ穏当なものです。書架45フィートとカード目録に必要な2000平方フィートとの対照を強調して、広大なスペースの節約という結果を明らかにする必要はほとんどいらないでしょう。

残りは費用の問題だけです。なぜ大きなカード目録を維持するのにあれだけの費用がかかるのでしょうか。それは、(増加分に対応するため)目録の引き出し1つには750枚のカードしか入っておらず、そのため200万枚のカードが2600個の引き出しを占めており、結果として毎週1500枚のカード(おおよその受入量です)の組み込み作業はほとんど同数の引き出しの開け閉めを伴うからです。この費用はとても莫大なものなのでほとんどの図書館は(もちろん議会図書館自身は違いますが)カードを貯めてから整理することで、目録の有用性を損ないます。もし約6000枚のカードが同時に整理されるなら、開け閉めすべき引き出しの割合は相当減少します。しかし、他方、前段階の並べ替え作業がより長くかかります。要するに、カード目録を維持する費用から逃れられません。評価はできるけれどもささやかな事柄は新しいカード750枚毎に1個の新しい引き出しを購入することです。それは約100個の引き出しとそれに対応したキャビネットを毎年購入することになります。

他方、提案のルーズリーフ目録は、ユニット対ユニット、引き出し対冊で、カード目録の10倍の件数が入るでしょう。良質なルーズリーフ・システムは(それは必ずしも機械仕掛けの留め金具を伴いませんが)引き出しよりも素早く操作することが出来る上、作業が座って行えるといった事実を無視するとしても、労働維持費が最大10分の1に切りつめられることは明白です。ルーズリーフ・システムが引き出しの10倍も費用がかからないので、この項目についても節約はあるでしょう。冊数の増大は、現在の水準で数年間続くとして、年に平均10冊の割合でしょう。

この提案を議論する際、議会図書館内外の権威ある様々な人物たちが反対を提起しましたが、その時それらは私には理にかなってるとも真面目とさえも思えなかったし、今でも思えません。別の解決方法がこうした専門家たちによって好まれ、カード目録の廃止と機械的方法による冊子体目録への転換が行われました。この解決方法は非常に歩みがのろく、

非常に量が多すぎ、とりわけ非常に無駄でした。というのも、そうした目録は消耗用のみ印刷されるからで、図書館の権威ある人物たちの嘆かわしき同意を得て、このような大目録を入手し、相当利益のある投機物に変えていた受益団体によってすでに始めてられていたプロセスです。こうした目録の最大のものでさえ、依然として完璧とはほど遠い状態にありますので、目録の最初の日付以前に出版された本を確かめるため四連続のアルファベット排列⁽⁶³⁾を調べる必要がすでにあります。全てが多大な費用で解体され置き換えられることになっていて、それが無限に続くのです。

VI

書物が保管される場所についてまだ何も話していませんでした。もちろん最も広い意味で書物について話をしているのですが。そうした場所は私にとって尽きることのない驚きと喜びの源です。詩人ハウスマンは詩を読んだときに感じた肉体の興奮を記述しました。私はもっとも幸運な男でして、というのも生涯を通じて、同じ経験を詩を読むときだけでなく、書物と一緒に暮らしているときにも、してきたからです。初めてどこかの図書館に足を踏み入れるときはいつでも深い感動の経験でした。まず辺りを見回し、その場所のスピリットを素早く吸い込み、宝の家へ第一歩を踏み出す。こうしたことを私は飽きることなく何度も経験してきました。興味のない書物などないので、興味のない図書館もあり得ません。私は世界のもっとも偉大な美術館、もっとも素晴らしい教会、もっとも壮麗な屋敷の多くで、たくさんの楽しい時間を過ごしてきましたが、この後すぐに私が述べようと思う図書館や、ぼんのちょっと付け加えると、ハンフリー公図書室⁽⁶⁴⁾、ザンクト・ガレン修道院図書館⁽⁶⁵⁾、コペの文書館⁽⁶⁶⁾、アンブロジア図書館⁽⁶⁷⁾、ハンティントン図書館⁽⁶⁸⁾に最初の一步を踏み入れたときのような感動—しばしば肉体的に感じたものです—そうした感動を覚えたところはありませんでした。そうした場所では形式と内容が圧倒的な全体を形成しています。

あといくつか特定のことがらについて言葉をお許しいただきたいと思います。大革命がイギリスの公共図書館に起こってきました。50年前、ごく少数の例外を除き、公共図書館は貧困な連中でした、主な職員は同じように資質が貧しく地位が低い人々からなっていました。ずっと前に、私はしばらくハムステッドの公共図書館委員会に勤めていました。その委員会は市議会の委員会の中でもっとも若くあまり重要ではないものの一つとみなされており、たぶん公衆浴場の陰、霊園より寸分上、とみなされていたものです。図書館長の任命といった重要な決定が下されねばならないときはいつでも、市長が突然現れて私たちに命令したものでした。市長はよく書物の購入にさえ口を挟んできました。スペイン内戦の時期、親ファシスト的出版物のみが図書館に入るよう気をつけていたのです。ある時、ジュール・ロマンの『善意の人』⁽⁶⁹⁾を購入予定リストの中に見つけると、彼はやってきてそれを買わないようにと言いました。彼の意見ではそれは品がないからだということです。そういうことのすべてを図書館協会が変え、我々の最良の公共図書館はいまや北アメリカの

公共図書館の前でさえ頭を下げる必要がありません。

特殊図書館の勃興は、図書館協会の設立に関わっていた我々の一部が期待していたような利益のすべてをもたらすはしませんでした。私の考えでは、こうした組織としては、彼らが厳密に言って図書館であれば、図書館協会の傘の下にやってくるべきで、残りのものは率直に自分たちは情報センターなのだというべきなのです。

偉大な図書館のうち、私が生涯愛したのはブリティッシュ・ミュージアムでした。私が閲覧券を申請したとき自分の年をちょっとごまかしましたが、その閲覧券を半世紀以上も保持しています。私が初めて知ったとき、ブリティッシュ・ミュージアム図書館は不完全なこの世界にあって限りなく完全に近い存在でした。そこはどんな場所についても、どの時代についても、自国以外のどんな言語についても、ほとんど全ての主題についても、最良の書物コレクションであり、最大のものでありました。その目録は最良でした。そのサービスは最良でした。その職員は学識があり、好感が持てました。私は多年にわたって、フレデリック・ケニヨンとA・M・ポラードとアランデル・エズデイルと会釈を交わしています。北図書室のアルコーブで作業していたとき、節約していない施設、快い環境、どんな教職員の談話室も優美にしてしまう談話の集まりを享受しました。『世界書誌』のどの版にも「ブリティッシュ・ミュージアム印刷本部の部長、役員および職員に感謝と称賛を込めて」という献辞を入れたのは理由のないことではありませんでした。(何年ものうち車輪は一周りました。というのも私が記念論文集の献呈によって名誉をあたえられたとき^{〔9〕}、選び抜かれエレガントに作られた受賞者の著作目録をその号に寄稿したのはサー・フランク・フランシス、時の図書館長兼首席図書館員でした。) ああ悲しいかな、栄光は去りました。アルコーブは北図書室の建て直しと大衆化の際に廃止され、そのすばらしい空間は他と同じただの大部屋になってしまいました。ブルームズベリのブリティッシュ・ライブラリは一そう呼べるようにならねばならないのですが一依然として世界でもっとも豊かではありますが、残りは全て消え去ったか消えつつあります。いくつかの恐ろしい間違いがそこで、そして博物館全体でなされており、大臣として有能であることを我々に示しつつある貴族の任命で頂点に達しました。

私は、毎日、一日中ブリティッシュ・ミュージアム図書館で作業していたとき、長年の間そうしたように、しばしば仕事を中絶しました。というのも私の健康がよかったことは決してなかったからでして、そんなときにはミュージアムの展示室、永年のうちに私が本当に詳しく知るようになったものですが、そこで新しい力を吸収したものでした。こんなことは図書館が物理的に博物館から切り離された時にはもはや不可能な、計り知れない利益ですし、分離は過去にしでかしたへまに匹敵するような最大級の間違いの一つです。

私がヨーロッパ大陸で一番よく知っている図書館はフランス国立図書館です。そこでは

〔9〕 *The Age of the Enlightenment : studies presented to Theodore Besterman* (Edinburgh &c. 1967).

話がたいへんちがいます。私が初めてそこを知ったとき、管理があまりに悪くて改善するしかない状態でしたが、偉大な人ジュリアン・ケインのたいへん長い職歴のおかげで、国立図書館は巨大な進歩をとげました。ただし印刷本の目録は例外で、1世紀たっても依然として僅かなペースでゆっくりと進んでいます。そこでの通常業務を妨げることなく中央閲覧室の下に穴を掘ることによって国立図書館の目録室を創設することは、想像力と結びついたときに何ができるかを示しています。

アメリカ議会図書館は、幸福で勤勉な数カ月を過ごしたところですが、50年前は不便さの点で記念碑的な建物と貧弱な蔵書しか持っていませんでした。ところが、最近まで何代も続く才能豊かで活動的な図書館長たちが、輝かしい機能的建物を付け加え、図書館自身をとてども強固なもの、たぶん今では世界最大のものに変えてしまいました。アーチボルド・マクリッシュが今日そこに戻り、目録作成者たちに君らは魔法にかかった無気力な状態で生きていると再び言うに違いありません。しかし、議会図書館とその他全てのアメリカの大図書館—そのうち、最良のものはニューヨーク公共図書館と、ハーバード、エール、プリンストンの各図書館—によって提供されるサービスは、その時でも並ぶものはありませんでした。これもまた変わりました。アメリカの図書館は今や多くのヨーロッパの図書館の所有者的・商業的態度を採用する傾向にあります。

過去と現在との違いをはっきりさせるという、この苦痛に満ちた主題についての私の結論は、恐ろしく単純です。もしブリティッシュ・ミュージアムと議会図書館が30年代に今日のように運営されていたら、個人的な調査、検査、記述に基礎を置く私の『世界書誌』や同様の著作が着手されることはなかったでしょう。

私が作業した図書館全てに言及することはできませんが⁽¹⁰⁾、特にヴァチカン図書館に敬意を表したいと思います。そこの職員は、故ティスラン枢機卿の頃から、私の問い合わせが彼らの大敵ヴォルテールに関するときでさえ、いつもすぐに応対して助けてくれました。さらに、ヴァチカン図書館は、私の関心のある手稿がそのコレクションの中に発見されたときには自発的に知らせてくれる（[オランダの]ユリアナ女王の私設図書館を別にすれば—しかしこれは別の話です）唯一の図書館です。これには感謝の言葉もないくらいです。更にヴァチカンの資料は想定されうるものだけではありません。いくつか例を挙げられますが、一つで充分でしょう。それはブリティッシュ・ミュージアムに次いで、古美術書について世界でもっとも素晴らしいコレクションを持っています。

建物としての図書館について細大漏らさず話をしたいのですが、今日は不可能のようです。次のことを付随的に言うだけにしましょう。それは、私の意見では、私の知っている図書館の中で、エール大学のバイネッケ図書館⁽¹¹⁾の外装がもっとも美しく、コインブラ大

[10] そのほとんどのリストは以下にある。*The Complete works of Voltaire* (1968), vol. 85, pp. xxxi-xxxvi.

[11] 写真ではこの建物の判断を出来ない。なぜなら半透明のヴァーモント大理石の壁に当たる光の芝居がその美しさの本質的部分だからである。

学の図書館の内装がもっとも美しいということです。新しいブリティッシュ・ミュージアム図書館を見るまで生きていられないでしょうし、そのことはブックマンとしてのこの50年が終わりにさしかかっていると感じるこの頃では少なからぬ私の悲しみでもあります。

訳注

- (1) *Idle thoughts* (Geneva, 1956)
- (2) Theodore Besterman, ed., *Voltaire's household accounts, 1760-1778* (Genève: Institut et Musée Voltaire; and New York: Pierpont Morgan Library, 1968)
- (3) Samuel Beckett et al., *Our exagmination round his factification for incamination of work in progress* (Paris: Shakespeare, 1929).
- (4) ロンドンのセント・ジェームズ・スクエアにある図書館。
- (5) ロンドンのゴードン・スクエアにある図書館。
- (6) Theodore Besterman, *The publishing firm of Cadell and Davies: select correspondence and accounts 1793-1836* (London: Oxford University Press, 1938). キャデル&デイヴィス社はロバート・バーンズの諸作品を出版した。
- (7) ロバート・バーンズ Robert Burns (1759-1796) の作品とバーンズに関する著作からなるコレクション。1942年にベスターマンがダートマス・カレッジ図書館に売却した。その時点で1500冊あまりのコレクションは、その後図書館の方で増補がなされ、現在は2000冊を越えている。Dartmouth College Library, *A Brief Guide to Printed Books in Special Collections* (Hanover, New Hampshire: The Friends of the Dartmouth Library, 1995).
- (8) スイスのジュネーヴにあるヴォルテールの家のこと。なお、ヴォルテール研究所兼美術館の設立は、1952年のことである。
- (9) Della Bella, Stephano, 1610-1664
- (10) Le Pautre, Jean, 1618-1682.
- (11) Alberti, Leone Battista, 1404-1472. *De pictura præstantissima, et nunquam satis laudata arte libri tres absolutissimi ... Iam primum in lucem editi.* (Basileae, 1540).
- (12) Leonardo da Vinci, 1452-1519. *Trattato della pittvra di Lionardo da Vinci, nouamente dato in luce, con la vita dell'istesso autore, scritta da Rafaello dv Frensne. ...* (Parigi: Appresso Giacomo Langlois, 1651).
- (13) Gaurico, Popponio, 1481 or 2-1528. *Pomponii Gavrici Neapolitani De sculptara. Vbi agitur De symetriis. De lineamentis. De physiognomonia. De perspectiua...* (Florentiæ, 1504).
- (14) Faithorne, William, 1616-1691. *The art of graving, and etching, wherein is exprest the true way of graueing in copper, also the manner & method of that famous Callot, & Mr: Bosse, in their seuerall ways of etching.* ([London]: Published by Willm: Faithorne, 1662).
- (15) Furtenbach, Joseph, 1591-1667. *Architectura navalis. Das ist: von dem Schiff-Gebäw, auff dem Meer vnd Seekusten zu gebrauchen ...* (Ulm: Jonas Saur, 1629).
- (16) Accolti, Pietro, fl 1625-1642. *Lo Inganno de gl'occhi, prospettiva pratica...* (Firenze:

- Pietro Ceconcelli, 1625).
- (17) Descartes, René, 1596-1650. *Renatus Des Cartes De homine figuris et latinitate donatus a Florentio Schuyt...* (Lugduni Batavorum: Apud Franciscum Moyardum & Petrum Leffen, 1662).
 - (18) Vasari, Giorgio, 1511-1574. *Le vite de' più eccellenti pittori, scultori, et architettori...* (Firenze: I Giunti, 1568).
 - (19) Vasari, Giorgio, 1511-1574. *Vita del gran Michelagnolo Buonarroti* (Firenze: Nella Stamperia de' Giunti, 1568).
 - (20) Calvo, Marco Fabio. *Antiquae urbis Romae, cum regionibus simulachrum* (Romae: Valentius Dorichus, 1532).
 - (21) Desgodetz, Antoine Babuty, 1653-1728. *Les edifices antiques de Rome dessinés et mesurés très exactement* (Paris: Jean Baptiste Coignard, 1682).
 - (22) Barri, Giacomo, ca. 1630-ca. 1690. *The painters voyage of Italy* (London: Printed for Tho. Flesher, 1679).
 - (23) Plot, Robert, 1640-1696. *The natural history of Stafford-shire* (Oxford: Printed at the theater, 1686). ただし、ベスターマンのカタログには、*The natural history of Oxford-shire* (Oxford and London, 1677) が含まれているのみである。
 - (24) Parkinson, John, 1567-1650. *Theatrum botanicum: The theater of plants. Or, An herball of large extent* (London: Printed by Tho. Cotes, 1640).
 - (25) Ferrari, Giovanni Battista, 1584-1655. *Hesperides sive De malorum avreorum cultiva et vsv libri quatuor* (Romae: Sumptibus Hermanni Scheus, 1646).
 - (26) Jonston, Jan. *Johannis Jonstoni, ... Notitia regni vegetabilis, seu Plantarum a veteribus observatarum* (Lipsiae: sumptibus V. J. Trescheri, 1661). ただし、ベスターマンのカタログには、*Dendrographias sive Historiae naturalis de arboribus et fruticibus tam nostri quam peregrini orbis libri decem* (Francofurti ad Moenum: Typis Hieronymi Polichii. Sumptibus Haeredum Matthaei Meriani, 1662) が含まれているのみである。
 - (27) Le Bouteux, Michel. *Plans et dessins nouveaux de Jardinage du Sr le Bouteux* (Paris: chez N. Langlois, 1680?).
 - (28) Aldrovandi, Ulisse, 1522-1605?. *Vlyssis Aldrovandi Patricii Bononiensis Quadrupedum omniv[er]s[um] bisulcorum historia* (Bononiae: Apud Sebastianum Bonhomium, 1621).
 - (29) Olina, Giovanni Pietro, fl. 1622. *Vcelliera ovvero Discorso della natura, e proprietà di diversi vcelli* (In Roma: Appresso Andea Fei, 1622).
 - (30) Belon, Pierre, 1517?-1564. *La nature & diversité des poissons, avec leurs pourtraicts, representez au plus pres du naturel* (A Paris: Chez Charles Estienne, 1555).
 - (31) Hoefnagel, Jakob, 1575-1630. *Diversae insectarum volatiliu[m] icones* ([Amsterdam]: Typisq[ue] mandatae. a Nicolao Ioannis Visscher, 1630).
 - (32) Barlow, Francis, 1626?-1702; Hollar, Wenceslaus, 1607-1677. *Seuerall wayes of hunting, hawking, and fishing, according to the English manner invented by Francis Barlow. Etched by W. Hollar* ([London]: And are to be sould, by Iohn Overton, [1671]).
 - (33) ?Chauveau, Hardouin. *C'est l'ordre qui a esté tenu à la nouvelle et ioyeuse entrée*

- ([Paris]: On les vend à Paris chez Jacques Rosset, [1549]).
- (34) Amphiareo, Vespasiano, 1500 or 1-1563. Vn novo modo d'insegnar a scrivere et former lettere di pivsorti ([In Vinegia : per Curtio Troiano], 1548).
- (35) Les Plaisirs de l'île enchantée (A Paris: De l'imprimerie royale, 1673 [i.e. 1674]).
- (36) Alciati, Andrea, 1492-1550. *Andreae Alciati Emblematvm libellvs* (Parisiis: Excudebat Christianus Wechelus, 1534).
- (37) Paccioli, Luca, d. ca. 1514. *Diuina proportione Opera a tutti glingegni perspicaci e curiosi necessaria Oue ciascun studioso di Philosophia* ([Venetiis]: A. Paganus Paganinus, [1509]).
- (38) Tory, Geoffroy, ca. 1480-ca. 1533. *Champ Fleury* (Paris: Geofroy Tory and Giles Gourmont, 1529).
- (39) Hugo, Herman, 1588-1629. *De militia equestri antiqva et nova ad regem Philippvm IV.* (Antverpiæ: Ex Officina Plantiniana Balthasaris Moreti, 1630).
- (40) Marzioli, Francesco. *Precetti militari* (In Bologna : Per l'Erede di Dominico Barbieri, 1670).
- (41) Dürer, Albrecht, 1471-1528. *Underweysung der messung mit dem zirckel und richtscheyt in Linien, ebnen und gantzen corporen* (Gedruckt zu Nüremberg, 1525).
- (42) Bertelli, Ferdinando, ca. 1540-1596. *Omnivm ferè gentivm nostræ ætatis habitvs, nvqvam ante hac æditi* (Venetijs : Typis excudebat Ferdinando Bertelli, 1563).
- (43) Caroso, Fabritio, ca. 1525-ca. 1605. *Il ballarino* (In Venetia : Appresso Francesco Ziletti, 1581).
- (44) Mercurialis, Hieronymus, 1530-1606. *Hieronymi Mercvrialis De arte gymnastica libri sex* (Venetiis, 1573).
- (45) Tuccaro, Arcangelo, b. ca. 1535. *Trois dialogves de l'exercice de savter, et voltiger en l'air* (A Paris : Chez Clavde de Monstr'oeil, 1599).
- なお、1992年の再録版では、“fencing (Thibault 1628)”に変更されている。
- (46) Jousse, Mathurin, b. 1607 serrurier, architecte. *La fidelle ouverture de l'art de serrurier* (A La Fleche : Chez Georges Griveav, 1627). *Le theatre de l'art de carpentier* (A La Fleche : Chez Georges Griveav, 1627).
- (47) Foresti, Jacobus Philippus, 1434-1520. *De plurimis claris sceletisque mulieribus* (Ferrarie : Laurentij de Rubeis de Valentia, 1497).
- (48) Roswitha von Gandersheim, ca. 935-970. *Opera Hrosvite illustris virginis et monialis Germane gente Saxonica orte nvper a Conrado Celte inventa* (Norunbergæ, 1501).
- (49) Holbein, Hans, the younger, 1497-1543
- (50) Erasmus, Desiderius, d. 1536. *Μωριας ἐγκωμιον* (Morias enkomion) (Basileæ : Typis Genathianis, 1676).
- (51) Fridolin, Stephen, 1430 (ca.)-1498; Wolgemut, Michael, 1434-1519. Also endet sych hye das Buch. der Schatzbehalter oder Schrein der waren Reichtümer des Heils vnnd ewyger Seligkeit genant... (Nuremberg : Anton Koberger, 1491).
- (52) Pleydenwurff, Wilhelm, d. 1494
- (53) Schedel, Hartmann, 1440-1514. *Registrum huius operis libri cronicacum cu[m] figuris*

- et ymagi[ni]bus ab initio mu[n]di (Nuremberg : Anton Koberger, 1493).
- (54) Theodore Besterman, *Old art books collected and catalogued by Theodore Besterman* (London : Maggs Bros. Ltd., 1975).
 - (55) *Magna Carta and other charters of English liberty* (Hampstead : The Guyon House Press, 1938).
 - (56) Theodore Besterman, ed., *Voltaire's correspondence* (Genève : Institut et musée Voltaire, 1953-65), 107 vols.
 - (57) Theodore Besterman, *A world bibliography of bibliographies* (London : Printed for the author at the University Press, Oxford, 1939-40). Theodore Besterman, *A world bibliography of bibliographies and of bibliographical catalogues, calendars, abstracts, digests, indexes and the like*. 2d ed. (London : Priv. published by author, 1947-49); 3d and final ed. (Genève : Societas Bibliographica, [1955-56]); 4th ed. (Lausanne : Societas Bibliographica, 1965-66).
 - (58) オックスフォード大学出版局のロンドン事務所があった建物の名称。
 - (59) *A catalog of books represented by Library of Congress printed cards, issued to July 31, 1942* (Ann Arbor, Mich., Edwards Bros., 1942-46), 167 v. 議会図書館のカードを写真により縮小複写した冊子体目録で、1頁に18枚のカードが再現されている。Theodore Besterman, "The Library of Congress and the future of its catalogue", *The Journal of documentation* (March 1946), pp. 194-205.
 - (60) Centaur. アメリカ人の書誌学者 Bruce Rogers がデザインしたヴェネチアン・ローマン体の一つ。
 - (61) Arrighi. Lodovico degli Arrighi da Vicenza (16世紀の習字教師。初め教皇文書局 Papal Chancery に勤務し、後に印刷業者となる) がデザインしたチャンセリー・イタリック体の一つ。
 - (62) Bembo. オールド・フェイス・ローマン体、又は、チャンセリー・イタリック体の一つ。
 - (63) *National Union Catalog: a cumulative author list representing Library of Congress printed cards and titles reported by other American libraries. 1953-1957* (Michigan, 1958), 28 v.; *1958-1962* (New York, 1963), 50 v.; *1963-1967* (Michigan, 1969), 59 v.; *1968-1972* (Michigan, 1973), 104 v. の4セットを喩えているものと思われる。
 - (64) オックスフォード大学ボドリー図書館の中にある貴重書図書室の通称。
 - (65) Stiftsbibliothek, St. Gallen. スイスのザンクト・ガレン州ザンクト・ガレンにある修道院の図書館。
 - (66) スイスのヴォ州コペ (Coppet) にあるコペ城の文書館。この城にはかつてジャック・ネッケルと娘のスタール夫人が居住していた。
 - (67) Biblioteca Ambrosiana. イタリアのミラノにある図書館。
 - (68) Huntington Library. アメリカ・カリフォルニア州サンマリノにある図書館。
 - (69) Romain, Jules, 1885-1972. *Les hommes de bonne volonté* (Paris: Flammarion, 1932).

訳者あとがき

本書は、*Fifty years a bookman: The Arundell Esdaile Lecture 1973 by Theodore Besterman* (London: The English Association and The Library Association, 1974) の翻訳である。原著はセオドア・ベスターマン (1904-1976) が 1973 年にイギリス図書館協会と英語協会の合同会議で行ったアランデル・エズデイル記念講義の原稿を出版したものである。

なお、同じ年に講義名の異なる版がアメリカで出版され (*Fifty years a bookman: Third Annual Richard H. Shoemaker Lecture, 1973* (New Brunswick, N. J.: Rutgers University Graduate School of Library Service, 1974).), その後 *Theodore Besterman, bibliographer and editor: a selection of representative texts edited by Francesco Cordasco* (Metuchen, N. J., & London: The Scarecrow Press, Inc., 1992) に再録された。1992 年再録版とロンドン版を見比べてみると、ロンドン版ではイタリック体だった本文が再録版ではローマン体に直され、本文のごく一部が変更されるなどの小さな変化が存在する (本文上の重要な変更点については訳註に記した)。アメリカ版自体は未見であるが、両者の違いは元来ロンドン版とアメリカ版の違いに由来するものであろう。

本書はベスターマンの自伝的作品であるが、彼の前半生についてはあまり触れられていないので、ここで簡単に記しておく。

セオドア・ベスターマンは 1904 年 11 月 18 日ポーランドのユダヤ系の家庭に生まれた。幼少時に家族とともにロンドンに移住し、移住後はもっぱら自宅で教育を受け、学校教育をほとんど受けず、大学にも通わなかったという。その彼が十代の時に最初に関心をもったのが神智学 theosophy であった。神智学とは、「人間に神秘的霊智があって、これによって直接に神を見ると説く信仰・思想」(『広辞苑』) のことで、ベスターマンはその指導者であるアニー・ビサント (1847-1933) を敬愛し、*A bibliography of Annie Besant* (London: The Theosophical Society in England, 1924) を出版した。これは彼が二十歳の時に出版した最初の著作であった。

神智学と並行して、パラノーマルな現象への関心を深め、1927 年から 1935 年まで心靈研究協会 (Society for Psychical Research) の調査官の一人であった。複数の論文を発表するほか、機関誌の編集者及びライブラリアンとなり、協会図書館の蔵書目録 *Library catalogue of the Society for Psychical Research* (Glasgow: Robert MacLehose & Co., 1927) 及び四つの補遺 (*Supplement, 1927-1928; 1928-1929; 1929-1930; 1931-33* (1928-1933)) を出版した。

他方、民俗学や人類学にも関心を示し、アーネスト・クロウリーの *The mystic rose: a study of primitive marriage* の 1927 年版や *Studies of savages and sex* の 1929 年版などを編集し、1934 年には *Bibliography of Sir James George Frazer* を、1935 年には *A bibliography of Sir Oliver Lodge* を出している。

こうした前半生について、彼の義理の息子であるエドウィン・ベスターマンは次のように述べている。

彼の人生の初めと子供時代は並はずれて不幸だった。彼の父は極端に限られた展望をもつ明らかに偉大な学者で、セオドアに学究への種子を確実に植え付け、家庭で彼の教育の多くを引き受けた。事実、彼の正規の教育はほとんどなく、ハロウ地域でふた学期のみだった。他には正規の教育を受けておらず、大学教育もなかった。若い頃から毎日、自己教育のため、昼食用にリンゴを1個持って、ブリティッシュ・ミュージアムに赴いたが、いつも母親からとても辛辣なコメント付で送り出されたようだった。彼には14歳で溺死した弟がいて、それが明らかに家族の社会生活すべてを止めてしまい、彼の不幸な子供時代をいっそう例示している。10歳の私に初めて会ったときの彼の態度は、彼が明らかに一度も子供だったことがなく、彼の人生のほとんどいかなる時も子供たちを理解したことも親密であったこともなかったようで、彼は明らかにこの点で多くをし損なった。不運なことに、彼は自分の教育を誇る代わりに、常にこれを隠し、ある点をまるで伝統的な教育システムを出たかのように粉飾さえた。このことは、彼が二十歳で最初の本を出版したので本当に注目に値する。

彼の初期の関心は、実のところ、彼が出会った人々に導かれたもので、もっとも初期の一人はアニー・ピサントで、次がサー・オリヴァー・ロッジ、そしてサー・ジェームズ・ジョージ・フレーザーだった。この人たちに彼は初め書誌を作るために会い、その後、彼らとの接触を通して心霊研究へ関心をもった。

……三十代半ばに最初の妻と離婚したというスキャンダルが彼の友人のほとんどを失わせることとなり、心霊研究協会との関係を断念しなければならなくなった。このことは彼をかなり苦しめた。

(Edward J. Carter, "Theodore Besterman: a personal memoir", in *Theodore Besterman, bibliographer and editor*, pp 41-42)

学究生活の当初から書誌との関わりの深かったベスターマンであるが、1930年代に入ると書誌への傾倒がいっそう明らかになる。1931年にロンドン・ユニバーシティ・カレッジの図書館学部講師となり、1935年には編者の一人として招かれたオックスフォード書誌学叢書から *The beginnings of systematic bibliography* を出版した（翌年第二版、1950年に改訂第三版にあたるフランス語版）。当時イギリスでは、W・W・グレッグらが“new bibliography”あるいは“critical bibliography”を提唱し、従来の書籍を列挙・分類する書誌から書籍の成立過程を比較的・歴史的に研究する書誌学への「改革」を行っていたが、

ベスターマンはそうした動きに反し、従来の列挙・分類を重んじる書誌（グレッグが命名するところの“systematic bibliography”）を擁護した。

1938年には *The publishing firm of Cadell and Davies: select correspondence and accounts 1793-1836* を出版した。この同じ年、*The travellings and sufferings of father Jean de Bréfeuf* を出版し、翌年には *The Pilgrim Fathers* を1622年版からのリプリントとして出した。さらに、*Magna Carta and other charters of English liberty* の翻訳を出している。これは彼の短命なガイオン・ハウス・プレスの出版物である。このコピーは第二次世界大戦中、アメリカ議会図書館でオリジナルのチャーターとともに展示されていたという。

そして、1939-40年、『世界書誌の書誌』を出版することとなった（第二版は1947-49年、第三版は1955-56年、第四版は1965-66年）。採録件数117,000件以上、書誌の書誌としては桁外れに包括的なこの書誌の出版に際して生じた出版業界との軋轢については、本書に詳しい。

『世界書誌の書誌』の初版から第二版まで時間が空いているのは、ベスターマンがイギリス軍に従軍し、戦後は1949年までユネスコに関係していたからで、ユネスコでは国際情報交換局の局長を務めていた。ユネスコでの活動とそれ以降のヴォルテール研究における活躍については本書の語るとおりである。

彼は1976年11月10日、オックスフォード近郊のバンベリーで亡くなった。

ところで、ベスターマンの人柄について、エドウィン・ベスターマンが興味深いことを述べている。

社交面では、彼はむしろ隠者の生活を送る傾向にあって、ほとんどもてなすこともなく、わずかな友人としか会わなかった。ごく親しい友人の小さなサークルはあったが、実際には少しも知人はおらず、彼がすべてを注ぎ込んでいた関心事は仕事だった。彼はユーモアのセンスはあったが、残念ながら極端に冷笑的かつ皮肉な口調の持ち主なので、彼をあまり知らない人はそれに度肝を抜かれるようで、多くの人は全く無意識に深く侮辱されたと思い、彼の方は、なぜ彼らがそんなに傷ついたのかについてしばしばとてもとまどった。彼は自分の皮肉の鞭を決して理解しなかった。

彼はとても規則正しい生活を送り、食事、仕事、起床、就寝の時間に正確無比であった。彼は仕事を始めるためとても早い時間、しばしば午前4時に起き、それに対応して早朝開始のため十分な睡眠を取るために早めに、9時半には就寝した。そのため、彼の社交生活と仕事の生活は實際上同一で、不幸なことながら食事を取るのと人に会うのところがむしろ退屈な合間の時間であったようだ。にもかかわらず、彼にアピールする人、あるいは彼が喜ばせたい人と会うときは、古今東西に並ぶもの

のないほど魅力的な上手な語り手となり、実際、社交生活に対してはジキルとハイドのような態度を取った。つまり、周囲のどの人よりもその部屋でもっとも魅力的な男か、そうでなければ痛々しい頭をもった熊のように振る舞った。不幸なことに、この多くがたぶんは何年もの間、潜在的で未診断の糖尿病の存在のために、彼は医者を全く信用していなかったので、ほとんど医者にはかからず、病気を見逃してきた。そのため、彼の気分の揺れはもともと器質的なもので、多くの人が考えたような神経症的なものではない。(ibid., pp 41-43 より)

こうした性格・気質が、本書の中で自らが語った数々のエピソードに別の光を投げかけるように見えるというのは言い過ぎであろうか。

最後に、名古屋大学名誉教授で現学士院会員の水田洋先生には訳文について細かく丁寧な助言をいただいた。元来、先生が翻訳の版權をお取りになっただけのを、訳してみないかと勧められ、軽い気持ちで引き受けたものの、自分の至らなさ、未熟さを痛感する訳業となってしまった。ここに深くお詫びすると共に、感謝の気持ちを表したい。

一橋大学社会科学古典資料センター *Study Series. No. 50*

発行所 東京都国立市中 2 - 1

一橋大学社会科学古典資料センター

発行日 2003 年 3 月 31 日

印刷所 新宿区早稲田鶴巻町 565-12

(有)啓文堂松本印刷
